

TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

On “Chokugen-suru.” (1942~43) by NAKANO
Yoshio.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 斎藤, 浩一 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/1519

[論文]

中野好夫「直言する」(1942~43)について

齋藤 浩一*

(Accepted November 14, 2017)

On “Chokugen-suru.” (1942~43) by NAKANO Yoshio.

SAITO Koichi*

Abstract: This paper focuses on “Chokugen-suru,” which was published in *Eigoseinen* Magazine by NAKANO Yoshio from October 1942 to February 1943. In this sensational article, he denounced the overall authoritarian, deceptive and insidious nature of the wartime English teachers and academics in Japan. With the aim of clarifying the underlying motive of his attack on such attitudes, the paper analyzes a series of relevant discourses made by him around the time. It concludes that the article was a part of his commitment to the Thought War, the leading national ideological mobilization movement during the ‘Great East Asia War.’

Key words : NAKANO Yoshio, Literature, The Thought War

はじめに

1942 (昭和 17) 年 10 月から翌 43 (昭和 18) 年 2 月にかけて、当時における英学界の権威ある専門誌であった『英語青年』において、中野好夫著「直言する」が計 8 回にわたり連載された。「以下何号かにわたって、年来英語英文学界に対して抱いてみた所感を出来るだけ率直に、齒に衣着せないで書いてみようと思ふ」⁽¹⁾との文言で始まる該記事では、「今日英語英文学界に於て最も緊急な問題」として、「技術以前の、或は技術を生かす人間の問題」が指摘されたように⁽²⁾、これは決して当時の英語教育論などで語られるような学者・教師たちがみせる表向きの態度の次元を扱ったものではなく、むしろその背後にある彼らの人格や人間性に焦点を合わせ、その醜態を痛烈に暴露・批判したものであった (内容は第 3 章にて詳論する)。本稿は、著者である中野好夫 (1903~1985) をこのような人格攻撃に駆り立てた要因について、同時代の彼による論説史料を参照しつつ、その人間性と時代文脈性の双方から検討することを通じて、該記事の歴史的な位置づけを行おうとするものである。

従来、著者の中野好夫については、その人物像や英語教師・英文学者としての業績を中心に、秋山安永氏⁽³⁾や佐藤林平氏⁽⁴⁾、速川和男氏⁽⁵⁾、中村敬

氏⁽⁶⁾によって論じられてきた。さらに、同様の試みは、中野の長女である利子氏によってもなされてお⁽⁷⁾、これは身近な家族の視点から行われた中野論として、貴重なものである。ただし、これらの研究は、概して総論的な性格が強く、主として中野のおよそ 80 年にわたる生涯を俯瞰し評価しようとする動機から検討がなされているがゆえに、かりに「直言する」といった個別事例について紹介されることがあっても、断片的な言及にとどまり、これを特殊な時代文脈性のもとに位置づけようとする作業がなされることはなかった。

このような中、はじめて該記事について本格的な論及を行ったのが宮崎芳三氏である。この記事を高く評価する氏は、まず、その特徴について、「中野はこの連載で、仲間の英語教師、英文学者を相手に、自分たちにごく身近な問題〔中略〕をえらんで「直言」したのである」と総括したうえで⁽⁸⁾、公や建前の世界では決して言明されない事態が暴露されたことへの痛快感を随所に表明している。そのうえで、こうした中野の行動がなされた時代環境——アジア・太平洋戦争の激化——を想起しつつ、「もともと中野がこのとき腹の中でこの戦争をどう思っていたかということについても、この「直言する」からは、私には正確には読み取れない」⁽⁹⁾「直言する」を読むと私には、中野のキビキビと動く精神の働きがまるで手でじかにふれるように感じとれるから、その働きが、議論の

* Department of Maritime Systems Engineering, Tokyo University of Marine Science and Technology (TUMSAT), 2-1-6, Etchujima, Koto-ku, Tokyo, 135-8533, Japan. (東京海洋大学学術研究院海事システム工学部門)

せまい枠をはからずもつき破ってしまうということにどうしてならなかったのだろう⁽¹⁰⁾との疑問を呈している。つまり、ここで氏により指摘されたのは、当時の英学界関係者たちがみせるホンネやウラの世界における醜態を剔抉するほどののびやかな知性をみせていた中野が、なぜ当時において誰もが想起するであろう戦争への思いをそれほど語っていなかったのか、という問題である。もっとも、氏はこれについて「推測」を行うのみであり⁽¹¹⁾、あらためて検討されるべき問題として残されたままである。

本稿では、こうした先行研究の状況を踏まえつつ、あえて以下の問いを設定することにしたい。すなわち、「直言する」では、なぜ業界内部が専ら焦点化され、そこにおける関係者たちの人間的なあり方が攻撃されたのであろうか。周知の通り、同時期には、戦時下の逆風のもとで、学界関係者たちはそれまでの英語教育のありようを再検討する必要に迫られ、結果、「敵国研究」などの戦時に即した再定義が活発に行われていた⁽¹²⁾。いいかえれば、戦時という特殊な時代状況を契機として、従来の彼らによる学問や教育のありようへの見直しは、積極的に行われていたわけである。しかし、中野が目にしたのはそうした次元ではなく、むしろその背後にある人間性の問題、すなわち表向きの態度の中では通常顕現することのない、学者や教師たちの持つ醜悪な人格であった。これこそ、「直言する」を他から際立たせる特徴であり、くわえて同様の偽装や欺瞞をしばしば目撃する現代のわれわれにおいても、一方で「よくここまでズバリと言ったなあ」⁽¹³⁾といった痛快感が発せられることもあるし、他方で「ここまで毒づいて指摘するほどのことですらない」⁽¹⁴⁾といった不快感が表明されることもある。先述した本稿の問題設定には、こうした「直言」性への好悪の次元に基づく評価を乗り越えるためにも、まずはそもそもなぜ中野が人格に注目したのか、その歴史的な位置づけを通じて理解してみたいという動機が含まれている。

なお、史料の引用に際しては、漢字の旧字体を新字体に改めたことをあらかじめ断っておく。

第1章 人間・中野好夫：学問と人生との直結

本章では、「直言する」において学界への人間的拒絶感をあらわにするにいたった中野が、そもそも自身でいかなる人間性を体現することを理想としていたのか、そのエスプリともいえる部分を当該期の史料の中から、可能なかぎり抽出していく

ことにする。

中野好夫は、1903（明治36）年、愛媛県は松山市に中野容次郎・しんの長男として生まれた。のちにキリスト者となったとされるこの両親の教育は、彼によるとすこぶる「厳格をきわめた」らしく、とりわけ「人に笑われるな」と「嘘をつくな」の2点については、ときに「烈しい折檻」を伴うほどの厳しさでしつけがなされたという⁽¹⁵⁾。このような環境で幼少期を過ごしていた中野は、やがて移住先であった徳島県の寺島尋常小学校に入学、その後県立徳島中学校、京都の第三高等学校を経て、1923（大正12）年には東京帝国大学文学部英文学科に入学、そこでは主として英文学者・齋藤勇や、当時来日中の詩人・ブランデン（E. Blunden）の薫陶を受けた。そして、3年後に同学を卒業した彼は、当初希望していた新聞社への就職には失敗し、かわりに千葉県成田中学校に英語教師として採用されることになった。この事件は、長女の利子氏によれば、中野にとり「よほどショックだったらしく、のちのちまでその悔しさを家族の前に隠さなかった」とされるが⁽¹⁶⁾、このような挫折があったからこそ、彼の英学界関係者としてのキャリアが始動したといえる。そして、その後の彼の活躍の場は東京へと移り、郁文館中学校や府立女子師範学校、府立第二高等女学校における教員生活を経て、1934（昭和9）年には、東京女子高等師範学校の助教授に就任、その翌年である35（昭和10）年には、恩師である齋藤勇の招聘を受けるかたちで、東京帝国大学文学部英文学科の助教授に就任した。それまでに、単行本である『パニヤン』（1934）の出版をはじめ、文芸批評や翻訳、演劇論等で多彩な活躍をみせていた彼は、1940（昭和15）年に、岩波書店から『アラビアのロレンス』を刊行、さらに「直言する」を連載する1942（昭和17）年の時点では、日本英文学会の機関誌編集委員をも務めていた。つまり、当時の中野は、その英文学者としての業績もあり、学界における重要な地位を占めるにいたっていたといえる。

しかしながら、当の中野本人は、前述したように、もともとは新聞社への就職を希望していたこと、あるいは大学院や助手生活等を経ていないという経歴もあり⁽¹⁷⁾、自らをいわゆる「学者」とすることに對して消極的であった。むしろ他の英文学者たちとは異なり、「私の英語勉強は英語そのものが面白くてしたのでない」と語り⁽¹⁸⁾、さらには「学者という集団の愚劣さ」（1951）⁽¹⁹⁾をはじめとするエッセイを戦後に公にするなど、一貫して自らを学界におけるアウトサイダーとして位置づける傾向があった。

近来、私は自分がいかに学者の資格に乏しく、単なる大俗物にすぎないことをつくづく痛感してゐます。〔中略〕元来が学者などになる抱負もなく、たゞ途を一筋に文学に求めた下根の私が、かりそめにも大学に席を占めてゐるなど、近来いよいよ沐猴にして冠するの戯画を自ら鏡中に眺めて慚愧にたへません。たゞ強ひて方法といへば、たゞ一筋にいかにかに生くべきかの解答を求めて文学の途を歩んで来たやうに、今になり来し方を顧みて、そんな気が致します。英文学でいへば学生時代からその直後へかけて Carlyle, Pater の一部を読んだり、ついで Samuel Butler を漁り、その後 Henry Adams, T. E. Lawrence などといふ風に、移つて来た興味の歴史を回顧してみますと、その時々には別に意識してゐた訳ではありませんが、なにかしら私だけには、一貫した生への問題の興味が私を動かして来たやうな気がするのです。他人様には随分と気紛れともなんとも見えませうが。一体昔からさうですが、私は自分自身になにか切実な問題を与へない勉強をすることは、どうしてもする気になれない人間でした。だから学校といふ組織は、大学をも含めて、地獄のやうに嫌ひでした。⁽²⁰⁾

つまり、彼の学問とは、通常の「学者」たちとは異なり、自らの人生問題への個人的な探求心に由来した、いわば自らの存在をかけた「切実」な営みにほかならないのであり、したがって、こうした求道精神と本来的に相容れない形式主義や統制主義は、自らとは無縁なものであるといふのである。このような自身の行動や、学究活動一般への他律性に対する否定的態度は、1942(昭和17)年7月の文部省による女子中等学校の英語科の随意科目化の際にも表明されており、彼は「ほんとうに語学教育への効をあげようと思ふならば、随意科あるのみである」として、これに賛同しつつ、生徒が「いやがるものを必修といふ美名で縛つてみたところでどうなるものでな」と主張した⁽²¹⁾。ここでは、英語科教育制度のありようによつて意見もさることながら、自身の考えを学界の利害に優先させるかたちで公言していたことが注目される。

このように、自身の学問にコミットする中で培われた理念や志を周囲の状況に迎合することなしに貫徹しようとする彼の姿勢は、後学の「青年」たちへの人生論においても反映されていた。とりわけ注目されるのは、中野が彼らに対し、一度人生の中で徹底的に「貧乏」する必要性を説いてい

たことである。すなわち、彼によれば、「何時までも貧乏してゐる奴も馬鹿だが、一度も貧乏を知らぬ奴も馬鹿である」というのである。そのうえで、若者がこのような逆境に直面しながらも「歯を喰いしばつて」自らの志す学問に没入することこそ、ほんとうに彼らの血肉となるのであり、くわえて周囲の状況や声に惑わされることのない真の力強さを生むことをも指摘した。さらに、こうしたどん底を味わうことが、「人間の真贋を見わける眼力」の養成につながることをも説明しつつ、「秀才だの、優等生だのとチャホヤされて学校を出て、いきなり専門学校教授になどして貰つて鼻の下を長くしてゐる奴は、人間の不幸これより大なるはない」と主張した⁽²²⁾。つまり中野は、自己の学問を人生と直結させることからくる真剣で、気魄にみちた、力強い生き方に共鳴していたのである。

こうした学問そのものへの没入とその人格化を説く彼の姿勢は、必然的に彼をして、いわゆる当時の「教養」理念への賛同者へと導いていくことになった。じじつ、彼による「教養」論や、それに付随する「読書」論は、一般向けの記事を含め1930~40年代にいくつか公刊されているが⁽²³⁾、そのいずれもが、平生の思考生活における要請から、主体的に行われる「読書」等をきっかけとして、そこから得られた幅広い知識を自らの内面において結合させつつ、統一化された人格を作り、それを自らの日常的判断や行動において実践することを説いたものであった。すなわち、彼によれば、「書物というものは虚心で読んで、それでな忘れようとしても忘れられないもの、ただそれだけが私自身の血肉の思想になるもの」であり⁽²⁴⁾、「単なる知識が、真に教養の名前に値するものにまで形成されるのは、それらの知識が、その所有主の全人格的判断の知的背景となるばかりでなく、更にその判断自体の形成に参加して、行動に向つてその推進力となつた場合に於てである」というのである⁽²⁵⁾。くわえて、このような自己放下を伴う人間形成のプロセスは、人間の生涯にわたって行われるべきものであり、つねに拡大し多元化しつづけるのびやかな知性を涵養することは、「地位と年齢と限らず、人間の一生を通じて瞬間々々に新しい問題でなければならない」のであった⁽²⁶⁾。

さらに、中野のいう「教養」は、上述の「個人」的次元のみならず、それを包摂する「社会」や「市民」としてのありようをも射程に含むものであった。彼はまず、そもそも「教養」なる語が、英語では「culture」(「文化」)と表現されることを踏まえつつ、当時の「近代文明」が、「それまで人間性によつて結合せられてゐた社会」を「機構といひ、

資本といひ、技術といひ、非人間的な支配」でもって「分裂」させたことを指摘する⁽²⁷⁾。そして、こうした時代変化により生まれた「所謂専門家」、すなわち自らの狭い「専門」の殻に閉じこもり、それを「われわれ自身の存在の仕方」⁽²⁸⁾という大きな人間的枠組みから意味づけることを忘れた者の存在を「社会にとって危険」であるとした⁽²⁹⁾。くわえて、本来的に「教育」＝人間形成を行うべき学校教育の場においてですら、こうした専門主義的風潮に便乗する「社会並に政府当局の実利的要求」による「職業教育化」が進んでいることを憂慮し⁽³⁰⁾、「教養」を「個人」に付与することの「社会」的意義をつぎのように説いた。

巨大な機械に似た現代の社会機構の中にあつて、各個人の受持つべき機能は、いはば分業過程のごとく一小部分のみを受持たされてゐる工人のそれに似てゐるだらう。彼は、直接には全体の構想に対する責任も持たないし、或はそれについて参加することは許されない。しかし教養とは、かかる一部分の分業過程の責任を果しながら、同時に全体に対する責任と理解とをもつことだ。一部分にしか責任を負はない限り、結局彼は社会的職人にすぎないのであり、全体の構想への責任を自覚するものにしてはじめて社会的芸術家たりうるのである。社会的職人そして社会的芸術家たらしめる不可欠の要件の一つは教養である。〔中略〕かうした意味での社会的芸術家の要望されるのは、社会の指導的階級、或は支配階級に於てである。⁽³¹⁾

つまり、一部の規格化された知の枠組みに安住する「職人」ではなく、むしろ柔軟で人間社会の「全体」をみる眼を失わない「芸術家」こそが、「社会」における「指導」者であるべきであるというのである。

そして、このような観点から中野が平生携わる英語英文学界を眺めてみるに、そこでしばしば存在するとされたいわゆる「英語屋」こそ、必然的に彼にとっては、軽侮の対象となるのであった。彼によれば、たとえ彼らの専門芸ともいえる（そして、のちの「直言する」においては痛烈に批判されることになる）英語教科書の編纂においてですら、「英語屋さんばかり集まってやつても到底駄目」であり、むしろそうした事業を統括する「委員長は英語専門家ではないが、語学教育に理解のある人物、それがなければ英語は余り出来なくとも眼界の利くやうな内部の人物、さうした人を選び、それに向かつて傑れた英語専門学者が胸を開いて討論、協力すべき」であるとした⁽³²⁾。つまり、

語学的スキルの如何といった、比較的狭い次元に埋没し充足しているこの種の専門技術者たちの指導性を、はなから信用していないのである。さらに、中野の「英語屋」批判はつづき、語学を学ぶ学生たちに対してすら、「独創性に富んだ人間は傑れた語学者にはならない。語学の才があるといふことは、なにもその人間の知能が特に優秀であるといふことには少しもならない」⁽³³⁾とのスウィート（H. Sweet, 1845～1912）の言葉を服膺しつつ、「人間は一流だが、語学は五流だといふ方は恥にも何にもならないが、語学は一流だが、人間は三流だといふやつは実際始末がいけない」と喝破した⁽³⁴⁾。つまり、彼にとり重要であったのは、決して英語の知識や技能の有無そのものではなく、あくまでもそれを用いる「人間」の内容なのであった。そして、この「人間」としてのありようや本質を自ら模索していくうえで彼がコミットしたのが、「文学」にほかならないことは既述の通りである。

それでは、いったいこの「文学」について、中野はいかなる思いを抱いていたのであろうか。すなわち、彼が血肉化し体現しようとしていた「文学」の精神とは、具体的にいかなるものであったのか。先述の通り、彼がこの学問に志すきっかけとなったのは、彼が往時から抱えていた人生問題、すなわち自らの人生をいかに生きるべきかといった真剣な求道精神であった。だからこそ、たとえば「作家が作家道に対して真剣でなかったり、文学者が肝腎の文学の精神を裏切ったりする無神経さ」⁽³⁵⁾を許すことができなかつたわけである。そして、ここでいう「文学の精神」について、彼はつぎのように説明をくわえている。

文学の精神とは何か？一言で言つて、僕は抗議する激しい精神だと思つている。もし人間が善人ばかりになったり、聖人の申し子みたいなのが人間の本性であるとしたならば、文学などの生れる余地もなければ、存在の必要もないと、僕は確信している。われは為さんと願う善はこれを為し得ず、為さざらんと願う悪はこれ為す、といった古えの悲痛な聖徒の告白が、好むと好まないにかかわらず人間性の核心を衝いているものである限り、文学がいかに国策から無用視され、いかに道徳家から攻撃されようととも恬として存在の意義を持つだろう。したがってかかる人間性の真実を、ややもすれば安易に、偽善的に、世間体よく包み隠そうとする通俗道徳や、政治的便宜に対して、激しく抗議する精神、それが文学だといふ僕は信じている。他の欠点や怠慢はと

にかく許しうる。だがこの文学にしてはじめてなしうる真実の抗議を喪うに至っては、他の点においていかに完璧であろうとも、すでにそれは味を失った塩にすぎないだろう。⁽³⁶⁾

つまり、本来的に複雑で、矛盾や欠陥を孕む「人間性」への興味を持ち、その「真実」をごまかすことなく剔抉することが「文学の精神」であるというのである。すると、このような「精神」を中野が文字通り生きていくことを志すかぎり、逆にそれに適わない種類の間人たちが、とりわけ自らの本心や本性を取り繕い、あるいはそれを隠蔽しつつ他者に同調し、建前を駆使して生きるような人間たちに出会うとき、彼はその苛立ちを隠すことなく、ときには峻烈な言葉でもってその不誠実さを批判するのであった。

たとえば、雑誌記事において自らの本名を明かさずに匿名で中野を揶揄してくる人物に対しては、真っ先に「なんといふ無作法者だ」と憤りつつ、「せめて人に切つて掛る前に名乗りをするくらの礼儀は心得てほしい」と反発した⁽³⁷⁾。同様に、後学の「英語英文学徒」にあてた人生訓でも、「同学界の間だけでボソボソ物の言へる人間になつても何もならない。広い座敷の真中で物を言つて、それが立派に通用するやうな人間にならなければ所詮駄目だ」⁽³⁸⁾とすることで、己を取り繕うことなく、堂々と公開の場において自身の思想を生きることを主張した。さらに、かつて自身の高等学校在学中に出会ったとされる「勉強しないでゴマカシてばかりゐる」英語教師については、彼は当時「この教師をいぢめたい」という動機から、英語を猛勉強するにいたり、そして、実際の授業に出席しては、その教師を「教室でいぢめて痛快がった」と回想している⁽³⁹⁾。ここから、中野の目に映る不誠実なニセモノが、たとえ立場上自分より強者であっても、公然と反抗することを辞さないとする彼の姿勢がうかがえる。だからこそ、これとは反対に、強者により与えられた枠組みを積極的に突き破ろうともせず、むしろそれに対して迎合し、安住するような学校の「秀才」たちに関しては、これを「薄気味の悪い」⁽⁴⁰⁾人物と評して嫌悪したのである。

したがって、これらの事実を踏まえても、かつて中野の薫陶を受けていた評論家・青地晨氏が、その人柄を捉え、「先生は人間を見る眼がするどく、甘さがない。だからこの人の前で偽善的なことをいったり、自分を粉飾したりすると、いっぺんに見破られてしまいそうだ」とし、「先生は一途になって損得を顧みない人間はそれなりに評価されるようだが、世の中をすいすい泳ぐおりこうさんは

嫌いなようだ」⁽⁴¹⁾と描写したことは、すこぶる的を射ているものといえる。

このように、中野は、自らの本心や本性を取り繕う欺瞞的な態度、あるいはこれにしばしば附随する陰湿で打算的な精神を排し、かわりに人間同士が澁刺と、つねに自己更新の可能性を含みつつ、本音で対話することのできる関係を生きることを望んでいた。むろん、そこには、個人の行動や知性を他律的に統制し規格化するような枠組みや立場といったものはなく、あくまでも自らの理念のもとで生きる自由で主体的な人間があるのみであった。そのうえで、「人間」そのものに対する興味を持ち、その本質を鋭く追求していく過程で培われた知見や精神を、自らの日常行動の中で実践できるほどまでに血肉化すること——むろん、こうした過程の中で得られた人格を生きる際には、その本来の真剣な自己没入性ゆえの感情的言動もみられた——、これこそが、自らの人生と「文学」を直結させて社会と格闘していた「教養人」である中野の精神であった。要するに、自他を含む「人間としてのありよう・生き方」こそ、彼にとっての中心的な問題の一つであったといえる。

そして、このような精神を文字通り生きようとしていた当時 30 代半ば過ぎの彼がやがて直面し、その後の人生をも大きく左右することになるのが、ほかでもなく、アジア・太平洋戦争であった。

第2章 「大東亜戦争」と中野好夫：「戦ふ文学者」としての戦争協力

本章では、前章で明らかにしたような人間性を理想としていた中野が、やがて迫りくるアジア・太平洋戦争をいかに受容し、行動するにいたったのか、のちに考察する「直言する」の連載が開始される 1942 (昭和 17) 年にいたるまでの時代史を振り返りつつ、検討をくわえていく。

周知の通り、アジア・太平洋戦争は「総力戦」であった。そして、こうした「総力戦」という新たな戦争形態の出現を象徴する歴史的イベントとなったのが、ほかでもなく、第一次世界大戦であった。1914 (大正 3) 年にヨーロッパで勃発したこの戦争では、従来からの軍事・産業科学技術の飛躍的發展に伴う長期戦化が現実のものとなり、その終結には、当初の予想をはるかに越えて 4 年もの歳月を要した。すると、このような状況では、従来のごとく実際に戦闘を行う軍隊のみならず、それを背後から物質的に支える国家の社会的・経済的力量、さらには参戦国民の戦意や団結心といった精神的援護が戦況の行方を大きく左右することに

なる。つまり、新しい「総力戦では、結局のところ国家ではなく「国民」が戦うのである」⁽⁴²⁾とされる状況が現出していたのであり、よってこうした動向をいち早く察知した当時の列強諸国の間では、来るべき戦争で想定されるあらゆる種類の戦闘形態——通商破壊戦などの「経済戦」のみならず、民衆へのプロパガンダ活動や精神動員などの「思想戦」をも含む——に対応するための国内体制作りが、漸次本格化していくことになる。

当時、「五大国」の一つとされた日本についても、こうした時代趨勢の例外ではなく、1910年代後半から20年代にかけて、「国民動員」や「精神動員」、「国家総動員」などの概念が陸軍関係者たちを中心に論じられるようになった⁽⁴³⁾。また1918（大正7）年には、当時の寺内正毅内閣のもとで、国家による経済的動員を想定した軍需工業動員法が制定されたほか、1925（大正14）年の陸軍現役将校配属令では、全国の中等学校以上の学校に陸軍将校が配属されることになり、国民に対する国防思想の宣伝普及が企図された。さらに、昭和年代に入った1927（昭和2）年には、内閣総理大臣のもとで一体的に動員資源を管理・運用する「資源局」が設置されたほか、2年後の1929（昭和4）年からは、当時における社会主義運動の高揚や、軍縮改革要求等への懸念から、軍部による強権的な思想弾圧や国民監視政策が本格化した⁽⁴⁴⁾。つまり、一連の「総力戦」体制作りとは、ヴェルサイユ体制以降の軍縮ムードや、同時期における急速な資本主義化に伴う社会矛盾、さらには進行する大衆消費社会化による民衆の精神的弛緩や風紀頹廃現象を一挙に解決する手段としても注目されていたのである⁽⁴⁵⁾。

このように、政治や社会への関心を深めつつ、国民の精神的統合に乗り出そうとする軍部の姿勢は、やがて1930年代の「満洲事変」から日中全面戦争期にいたるまでのいわゆる「非常時」の社会風潮によっても助長された。すなわち、当時の国内外における危機的状況を打開すべく、従来とは異なる方式に基づく「非常国策」の出現が期待されたのである。これに伴い、従来の「大正デモクラシー」的な社会を支えていた思潮が相対化される契機が生まれ、結果、欧米流の個人主義や自由主義、民主主義、議会主義などの思想が積極的な批判の対象となった。そのうえで、これらの代替物として唱導されるようになったのが、日本の伝統的価値観を体現するものとされた「日本精神」や「皇道精神」であった。すなわち、そこでは、国家による強力な国民統制を伴う「挙国一致」や「尽忠報国」、「滅私奉公」の精神、あるいは天皇

への絶対随順、さらには上述の反西欧主義的立場に立脚した国粹主義が鼓吹された⁽⁴⁶⁾。同時期の国民精神総動員政策と併行して現れたこのような反西欧主義的思潮は、やがて1938（昭和13）年11月の近衛文麿内閣による「東亜新秩序」声明、さらにはそれを発展させた「大東亜共栄圏」の確立を謳ったアジア・太平洋戦争へと向かう一連の道程の中で決定的なものとなる。

1941（昭和16）年12月8日、ついに英米両国との戦端が開かれ、翌42（昭和17）年にかけて日本軍のアジア各地での戦闘が本格化する中、当時の情報局次長として国民の精神動員にあっていた奥村喜和男は、このたびの戦争目的を国民に周知させるべく、ラジオを用いた教化演説をたびたび行った。そこで奥村はまず、今回の「大東亜戦争」が武力戦、経済戦、思想戦からなる「総力戦」であることを確認したうえで、「久しくアジアを禍したるアングロサクソンの利己的支配を根絶」し、新たに日本の家族的国家観・「八紘一宇」の精神に基づく「大東亜共栄圏」を建設することがその終局目的であるとした⁽⁴⁷⁾。つまり、この戦争の「世界史的意義」とは、究極的にいえば「日本精神と米英精神との戦ひ」、すなわち従来の西欧型国際秩序にかわる「世界新秩序のための偉大な思想戦」であり⁽⁴⁸⁾、よって将来の武力戦における勝利のみによる戦争の完遂はあり得ず、むしろ欧米流の個人主義や自由主義的精神そのものが、日本の情誼的主従関係に基づく全体主義的精神によって克服されるべきものとされたのである。このように、アジアにおける一大広域文化圏の形成に伴う国際的な思想闘争と定義されたことが、この戦争の大きな特徴であった。

そのうえで奥村は、「明治維新以来我が国は七十有余年に亘つて欧州文化の摂取につとめて来たのでありますが、その余弊が我々の思想の中に、また我々の生活の中に不知不識の間に垢となつて、こびりついてゐる」ことを憂慮し⁽⁴⁹⁾、そこから真の「思想戦の敵は、単に国の外だけではなく、国の内にもあり、更に又我々自身の中にもある」との認識を示しながら⁽⁵⁰⁾、「私達一人々々の国民が先づ米英的な物の考へ方と生活の態度を改めないで、どうして日本の新秩序を作ることが出来ませう。かくて世界新秩序の問題は、同時に私達一人々々の問題に外ならないのであります」とした⁽⁵¹⁾。そして、今後の「一億国民」がとるべき態度として、「一人一人が戦場に在る皇軍将兵の心を心として、その職域に於て決然と物質本位、利潤第一の人生観及び生活態度を改めて、真の日本精神に還らねばなりません。多年日本を毒して参りました米英

思想を一掃し撃滅して、本然の日本、正しき日本の姿を取り戻さねばなりません。そこに一億挙げての総力戦があり、思想戦の最も手近な実践があるのであります」とした⁽⁵²⁾。つまり、従来のかかわる「新秩序」の形成に従事する立場の国民として、まずは自らの思想生活を見直し、必要であればその清算と克服に乗り出すことが急務とされたのである。このように、国民各人をして、その人間としてのありようを再検討させるとともに、「大東亜共栄圏」を主導するにふさわしい思想文化を確立させようとする動きは、やがて上述の聖戦論が普及する1942(昭和17)年以降におけるいわゆる「国内思想戦」運動となって結実することになる⁽⁵³⁾。

もっとも、前述の奥村自身も、外国文化の摂取そのものの意義を否定することではなく、むしろ従来における「米英文化の克服によつてその余弊を排除」⁽⁵⁴⁾することに力点を置くものであった。しかしながら、上述の時代背景の中にあつては、敵国文化に通暁しているものとされた英語英文学者たちに対する風当たりが、その厳しさを増していくようになることは、自然のなりゆきであつたといえる。それでは、こうした逆境の中で、本稿の主たる考察対象である中野好夫は、いったいどのように振舞っていたのであろうか。これについて、ここであえて一言でもってまとめてしまえば、彼は敵国文化を知悉する者としての立場から、戦争に積極的に協力していた文学者の一人であつた⁽⁵⁵⁾。そもそも、かねてより、日本人の英語受容に伴う「英学」的精神を高唱するほどのナショナリストであつた彼は⁽⁵⁶⁾、早くも開戦直後の1942(昭和17)年1月に「アメリカ管見」と題する論稿を発表し、同国にまつわる詳細な思想文化論を展開したうえで、「アメリカも英国も立派な大国である。〔中略〕彼等が立派な国民なればこそ、われわれは敢てこれに戦ひ勝つことを決心してゐる」として、その戦意をあらわにしつつも、「今後いかに勝利の快報が到らうとも、われわれはゆめゆめ軽侮によつてこれに勝ちうる敵ではないのである。敵の長所を認めることによつて、これに勝ち得ないほどわれわれは貧弱な少国民ではない筈である」とくぎを刺した⁽⁵⁷⁾。つまり、同時期の者たちが、ややもすれば陥るであろう「日本はもう西洋に学ぶ所はない」⁽⁵⁸⁾とするような夜郎自大の態度を戒め、むしろ慎重に英米文化に学ぶことを通じた戦勝を期待していたのである。このように、中野がみせた開明主義的態度は、その後に本格化する「国内思想戦」運動における彼の行動にも、そのまま反映されていくことになる。

1942(昭和17)年5月26日、東京は丸の内にある産業組合中央会館において、社団法人・「日本文学報国会」の創立総会が開催された。本会は、前年12月24日に行われた「文学者愛国大会」における文壇の統合一元化に向けた決議の中から生まれた組織であり、主務官庁である情報局第5部第3課の指導のもと、約2600名(1942年7月現在)もの会員を擁する当時の一大国策協力機関であつた。その創立総会の席で、政府側代表として挨拶に立った先述の奥村はまず、このたびの「大東亜戦争」が「旧き世界観、古き政治観、古き文化観、古き芸術観の残滓が残存してゐる限り、之を撲滅払拭するまではやまない処の、その徹底的克服を目指す処」の「偉大なる思想戦」であると規定したうえで、「過去の政治・経済・文化乃至は世界観に対する全面的清算と、新しき時代の支柱となる歴史的原理の創造」を行うべき「文芸家の人々の決起と努力に期待する処実に多大なものがある」とした⁽⁵⁹⁾。ここから、このたび結集した文学者たちによる「国内思想戦」への貢献が期待されていたことがわかる。そのうえで、同会の中核となるべき役員が彼によつて指名され、常務理事として久米正雄ならびに中村武羅夫、理事として長与善郎、柳田国男、菊池寛ら16名、そして設置された8部会(小説、劇文学、評論随筆、詩、短歌、俳句、国文学、外国文学。のちに漢詩・漢文学が追加される)のうち、外国文学部会長にはドイツ文学の茅野蕭々、幹事長には中野好夫がそれぞれ就任した⁽⁶⁰⁾。さらに、その約1か月後の6月18日の発会式で、新たに同会の全構成員をまとめあげる会長に推挙された徳富蘇峰をこれらにくわえ、いよいよもつて同会の活動が本格的に開始されることになった。

もちろん、こうした文学者団体の動向は、類似する英語英文学界の関心を惹くところとなり、こうした要請に応じて、さっそく中野は、7月15日発行の『英語青年』に寄稿し、自らがその幹事長を務める外国文学部会のもようを一般に明らかにした。そこで彼は、昨年の「宣戦の大詔」以来、「文学者が国家目的に向つてその職域的努力を捧げつくすことを要求されてゐることは、今更僕などのいふまでもない」としたうえで、同会の定款第2章第4条の文言、すなわち「皇国文学者トシテノ世界観ノ確立」こそ、当該部会が「体認」すべき精神にほかならないものとした。そして、その後の話題は同部会の会員資格に移り、その入会には、まずもつて、「外国文学に関連する文筆活動によつて、一家を成してゐる」と会員に「認定」される必要があることを明らかにした。すなわち、

彼によると、『英語青年』の読者たちや、既存の日本英文学会の会員などとは異なり、単に「趣味に外国文学をやつてゐるとか、たゞ外国語をやつてそれを教へて職業としてゐる」者が、会員として「包含」されることはないというのである。そして、中野自身も、このような会員選別制度について、その「微妙な点に処理困難な線がある」ことを認めつつも、「たゞ同じ外国文学、殊に現在いろんな意味で荊棘の道にある斯道につながる同志として、一般英語研究者並に英米文学愛好者の好意と同情を期待したい」「僕等は将来きつと外国文学研究者諸君の感謝を受けるにふさはしい仕事をするつもりであるし、そのための小使走りなら甘んじてするつもりである」と言明した⁽⁶¹⁾。ここから、このたび英学界を代表するかたちで選ばれた中野の旺盛なる意欲と責任感がうかがえる。

そして、こうした気持ちを示すように、彼が同会に対して行った貢献は、まことに著しいものであった。たとえば、当面の事業として開始されたラジオ文芸講演活動では、外国文学部会の代表者として中野が講演を行うことが企画されたほか⁽⁶²⁾、7月27日の戦没兵士を顕彰する「忠霊塔」建設事業に際しても、彼は真夏の炎天のもとで、東京は後樂園にまで足を運び、その基礎工事を通じた「勤労奉仕」に従事した⁽⁶³⁾。さらに、8月2日から12日の間、全国80都市で開催された「文芸報国運動講演会」においても、中野は、戦時文化を主導する知識人として、その講演者の一人に選ばれたほか⁽⁶⁴⁾、その後の11月3日から10日にかけて行われた「第一回大東亜文学者大会」においても、彼はその大会議員の一人に選出されたうえで、会議に参加した⁽⁶⁵⁾。そもそも、後者の「大会」は、当時の「大東亜共栄圏」に属する日本（台湾・朝鮮を含む）・満洲・中華民国（汪兆銘政権）・蒙古の文学者たちが一堂に会するかたちで行われた国際会議であり、同会の文化事業の中でも最大規模のものであったが、その2日目の11月4日午前10時より行われた全体会議を傍聴する機会を得た中野は、さっそく大会終了後に自身の所感を表明し、つぎのような展望を示していた。「わが文学者の自覚は今後単に日本といふ従来の天地ばかりでなく、もとより根本はあくまで日本的伝統の自覚に根ざしながらも、その文学的視野はあくまで大東亜を一単位とする雄大なものに発展しなければならない」と⁽⁶⁶⁾。つまり、こうした言及からも明らかな通り、中野は同時期の「大東亜共栄圏」思想に同調しつつ、そのための文化建設にあたっていた「日本文学報国会」の活動に従事することを通じて、当時の「国内思想戦」に邁進していたわけである。

このような当時の日本社会における「思想戦」の動向は、やがて1942（昭和17）年も終わりに近づく12月にいたっても、その衰えをみせることはなかった。たとえば12月3日には、東宝映画『ハワイ・マレー沖海戦』（企画：大本営海軍報道部、監督：山本嘉次郎）が公開され、「心に入つた米英の撃滅」が高唱されたほか⁽⁶⁷⁾、12月23日には、新たな思想戦団体である「大日本言論報国会」（会長：徳富蘇峰）の創立総会も実施された⁽⁶⁸⁾。そして、中野もこうした一連の動きと連動して、雑誌『知性』に「思想戦と文学」と題する論稿を発表し、自らの「思想戦」協力に伴う信念を一般に披瀝した。すなわち、彼によれば、このたびの「総力戦下に於ては、文学者は好むと好まざるにかゝらず自動的に思想戦の第一戦闘士であり、よって「われわれの一言一行、否、無意識的行動までが否でも応でも思想戦全局に重大な影響を持つてゐる」ことから、その日常生活を送るにあたっては、自身の内部において決して己を取り繕うことなく、「文学者各人がまづ戦時下国民として立派に生きる」ことが肝要であるとした⁽⁶⁹⁾。そのうえで、これと同等の態度を国民一般にも期待する彼は、国民各人の人間性や思想生活が厳しく問われる「国内思想戦」において、個人が同胞を批判する際には、決して敵に対するような態度ではなく、むしろ「ことむけやわらぐ」るの戦ひ、慈悲の戦ひ」を、以下のような態度でもって遂行すべきであるとした。

大東亜戦争の大目的が万邦そのところを得せしむるものであれば、国内思想戦の目的もまた万民そのところを得せしむるものでなければならぬ。それにはたゞ一つの「誠」あるのみであると思ふ。いやしくも権威による力でもなければ、自家独善の強圧でもない。私は最近殊に痛感してゐるのであるが、文字文章に対する不信誤解も、私たちが直接胸襟を開いて、誠心を披瀝するならばまだまだ理解の道は開けてゐると思ふ。新占領地諸民族に対してさへ、誠心これに接すべきことが強調痛感された時にあたつて、どうして同胞相互が互に誠心を吐露するところに不幸な対立相剋がありえよう。況んや今日ほど一億戮力の要望される時はない長期戦だ。一人の日蔭者、一人の拗ね者もあらせたくないのだ。かゝる根本に於ては和解のための思想戦に於て、よき文学者の奮起を俟つこと切なるものがあるのは、私だけではあるまい。⁽⁷⁰⁾

つまり、国民相互間の「思想戦」では、同胞として精一杯の「誠」が尽くされること、すなわち

国民各人の相互理解を促し、その総力を結集するためにも、まずはこの戦争を生きる人間同士、つねに自己更新の可能性を踏まえつつ、本音で対話や相互批判がなされてしかるべきであるというのである。そして、このようなときにこそ、文学者がその職能上果たすことのできる役割についても、彼は同時に期待を寄せていたのであった。

こうして、中野が文学者としての戦争協力のありようを模索することは、必然的に彼をして、平素より志向する「文学の精神」に回帰させることにつながった。すでに前章でも確認した通り、彼が体現しようとしていた「文学の精神」とは、要するに、自他を含む「人間としてのありよう」をごまかすことなく直視し、その真実を誠実に別抉することであった。そして、こうした意識に、折しも本章で紹介した「国内思想戦」の論理——すなわち「大東亜共栄圏」の確立に向けて国民各人がその思想生活を見直し、その人間としてのありようを問い直すこと——が合流していく。これこそ、まさに、それまでの文学者・中野好夫が、一転して「戦ふ文学者」⁽⁷¹⁾に変貌した瞬間であった。そのうえで、このような特殊な戦争目的を彼が誠実に生きることを志すかぎり、必然的にそれまでの自身の人間としてのありよう、あるいはそれを育み、自らもその指導者の一人である英学界のありようが問題化され、それらの清算に向けた「慈悲の戦ひ」が、まもなくして開始されるようになることは、自然のなりゆきであったといえる。じじつ、このような決意が表明されていた最中に次々と公にされていたのが、次章で検討する「直言する」なのであった。

第3章 英学界の清算と克服：「直言する」の内容から

本章では、「直言する」において指摘された英学界の欠陥がいかなるものであったのか、その内容を具体的に検討していくとともに、そのような事実の暴露に向かわせた中野の動機づけにも焦点を合わせ、それらを前章までに判明した史実に徹しながら位置づけていく。

中野が前出の「日本文学報国会」の活動に邁進していた1942(昭和17)年10月15日、同日発行の『英語青年』第88巻第2号を皮切りに、「直言する」の連載が開始された。そして、この初回の記事の中で、彼はさっそく、同時期の英学界をめぐる時代状況の変化を意識したつぎのような警告を行った。すなわち、「今日以後の英語英文学者は一世代前の彼等が享受してゐたやうな苟しくも安

易感をもつて、この途を進むことは許されない」と。こう述べたうえで、彼は従来の「安易感」を積極的に打破するため、まずは「何を反省すべきか、何が誤つてゐたか、宜しく鼓を鳴らして具体的に責めなければならない」とし、「内に対つては、現在ではもはや甘やかされた仲間褒めに好気になつてゐる時ではな」とした⁽⁷²⁾。つまり、中野をして、このたび「直言する」にいらせた直接的な動機とは、ほかでもなく、「一世代前の彼等」がみせていた現実のありようを直視し、それを徹底的に批判することを通じての学界の刷新にあったわけである。すでに本稿の冒頭で紹介したように、ここでは、このような刷新の必要性を促したときされる当時の時代背景、とりわけ同時期の者たちであれば誰もが想起するであろう戦争に関わる事実が、具体的に述べられることはなかった。しかし、前章で明らかになった当時の彼による一連の行動、そして何よりも、のちの同記事において「僕は時局便乗者であり、そして興奮したあはて者」であり⁽⁷³⁾、いまこそ「みんなが肚を決めて、一ぱいの信念で語り合ふ時」⁽⁷⁴⁾との時局認識が示されていたことをも考えれば、これは明らかに当時における「国内思想戦」の動向に影響されたものとみて間違いないであろう。そして、このような運動へのかねてよりの邁進ぶりを示すように、中野は、自らの同志ともいえる英語教師たちに対し、以後容赦なく糾弾を浴びせていくことをつぎのように予告したのであった。「言ひたいことはいくらでもある。これはホンの序の口だ。次号からはドシドシ具体的な問題に触れるつもりだ」と⁽⁷⁵⁾。こうした筆致からもうかがえるように、中野による「直言する」とは、決して英学界の真実を他人事のごとく冷静にかつ客観的に述べた文章ではなかった。

それでは、こうした緊迫した当事者性でもって中野が訴えようとした事実とは、具体的にいかなるものであったのか。それは彼によると、第一に、「英語教師の世界が妙に小利口で、人の顔色ばかり窺つてゐるやう」であること⁽⁷⁶⁾、すなわちその関係者たちの多くが、自らの損得勘定に基づき、学界であらかじめ規定された枠組みに同調して生きることを常としているため、自らの率直な意見や感情を賭した言動を行うことがないということであった。そして、こうした欺瞞的な雰囲気の中に彼が看破したのが、つぎのような陰湿で閉鎖的な人間関係のはびこる学界の姿であった。

英語界の最も愚劣な習慣の一つは、「某々の外国語教育に関する意見」などと称して、愚にもつかぬ子守唄のやうな、都合のよい意見ばかり集めて喜んでみたり、無責任極まるハガ

キ回答などに血道をあげてゐることだ。〔中略〕わが英語英文学界に最も欠如してゐるのは公開的討議の精神である。ちよつと考へても、相当長い過去を通じて果してどんな学問的論争があつたか。互ひに信念を賭けたどんな応酬があつたか。空々寂々である。それならすべて浮世の名聞など超越しきつた聖哲の集まりかといへば、どうして蔭口と愚痴と小股掬ひとはいとも幸きはふ国なのである。ボソボソと女の腐つたやうな愚痴か、虫眼鏡で尻の疣をのぞくやうな小股掬ひだ。ソクラテスの産婆といふ言葉があるが、活発な論争のないところに学問や精神の発達は断じてない。濡れ雑巾で顔を撫でるやうな仲間褒めや、お髭の塵埃払ひなどから、高邁なものが出て来てたまるものか。だがそれよりも斯学界で最も性質の悪いのは頬被り主義である。少し面倒と思へば黙殺といふ一手で、そのくせ蔭では身近の雑魚共を集めて一かど気焰を上げてゐるのだから可笑しい。例へば知名の文法学者で、その方面では実に尊敬すべき篤学者である某博士なども、頬被り主義では一流の大家である。この人の沙翁註解は、僕の知る限りでも三度は明かに、もし学を尚ぶの士ならば当然答弁の義務を有つべきものと思はれる批評を受けてゐる。だが彼は終始頑として黙殺主義だ。そのくせ他人の欠点といふと、不必要と思はれるまで厳かつ急に責めることと、自家の創見らしいもの（といふのは半分は頬被りの受売りなのだから）は鬼の首でも取つたやうに吹き立てるのが、唯一のお家芸だといふからいよいよ始末が悪い。これなど無論極端な例だが、かうした態度が許されてゐるところに斯学界の空気の一斑がうかがはれよう。もつとも一方には折角反駁があるかと思へば、これはまたおよそ問題の第一義を逸して、相手の言分の枝葉末節だけを把へてからかつたつもりになつてゐるのだからいやになる。第一義の問題にはテンデ明き盲で、重箱ほぢくりといへば恐ろしく目の利くのもわが英語英文学界の驚くべき特色である。例へば南洲翁の遺訓を読みながら仮名遣ひの問題ばかり数へてゐるやうな精神である。⁽⁷⁷⁾

要するに、学界の強力な共同体主義のもとで、各人がその本心を偽装しつつ建前で生きているため、そこでは、あらかじめ公認された枠組みに反するような行動がとられることはなく、よって自らの信念をかけた、そして物事の本質や相互の革新を見据えた誠実な対話が堂々で行われることも

ないというのである。そのうえで、こうした硬直化した雰囲気の中で、息苦しさを感じていた中野は、それに伴う苦痛をつぎのように訴えた。「斯学界のこの滅入つた空気が僕には堪らないのだ。一陣の風を通さうではないか。〔中略〕一つや二つ撲り合つてもよい。後でカラリとするわが英語英文学界の晴朗が渴いたもののやうに僕には欲しいのだ」と⁽⁷⁸⁾。

さらに、こうした事態にくわえて指摘されたのが、上述のような世界に生きる教師たちの学問的営みにおける不誠実さ、とりわけ彼らにより折に触れて語られる遠大な英語教育目的論の欺瞞性であった。周知の通り、従来の英学界では、その頭目的存在であった岡倉由三郎を中心に、英語科教育の目的が、日本文化のさらなる向上発展を企図した英米文化の摂取、ならびにこれを通じた個人の人格的陶冶にあるとされてきた⁽⁷⁹⁾。しかしながら、その岡倉が1936(昭和11)年にこの世を去り、やがて時代が戦時期へと突入すると、残された英語教師たちは、一転して敵国語となつてしまった英語を学ぶ意義を一般に説得すべく、新たに「敵国文化研究」といった目標掲げること、時局に適合していく姿勢をみせていた。つまり、こうした過程からもからもわかる通り、彼らの述べる大義名分とは、いずれにせよ、英語を媒介とした英米文化研究にあつたといえる。ところが、このような動きをみていた中野によれば、彼らの述べる目的論とは、全くもって嘘であり、決してその本心や実態を忠実に反映したものではないという。すなわち、「あの莫大な労力を割いて、諸君のいふ英米の文化的性格とやらの探究に捧げてゐたら、今頃あわてゝ宣言ばかりの空鉄砲を放つ醜態はなかつたらうと思へるのだ」と⁽⁸⁰⁾。それでは、前出の高尚な目的論の背後で彼らが行っていたこととは、いったい何であつたのか。それは、要するに、①「教師」という立場を利用して(質の悪い)英語辞書や教科書を量産し、生徒に売りつけて、暴利を貪ること、②従来あつた、英米との対決心に基づく採長補短精神を放棄し、「敵国文化研究」とは名ばかりの英語屋的な精神でもって、英米崇拜に打ち興じることなのであつた。

まず、①の辞書と教科書の問題について、中野はつぎのような皮肉を述べる。「なにしろ辞書、教科書の生産力だけは英語教師の特技で、これだけは正直に言つて僕を心から驚かせたものである」と。そのうえで、前者の辞書について、そのほとんどが、巷の宣伝広告で謳われるような独自性を備えたものとはいえず、よって「蚤の壘丸ほどの新工夫を、さも鬼の首でも取つたやうに売物にす

るなどは、使はせられる生徒こそ大迷惑だ」と痛罵した⁽⁸¹⁾。同様に、その「生徒」たちが日々強制的に購入を迫られる教科書についても、中野はその「濫造」の背後にある事情をつぎのように暴露する。

奇怪なのは専門学校教科書の濫造振りだ。学校を出て、専門学校教師にでもなつて五六年すれば、忽ち自家用教科書を作つては生徒に売りつけるのだ。勿論中には多少編纂の意義のあるものも随分ある。だがひどいものになると、すでに日本版だけでも数種あるものを、先人苦心の注釈までそのままに、そつくり猫婆を決めるのだからおそろしい。いづれ教科書屋などに先生先生とおだてられると、ついいゝ気になつてする仕事だらうが、第一その教科書屋といふのが、一つ違へば馬を牛にも乗りかへるし、英を独への七化けくらゐは朝飯前の芸当だといふ九尾の狐だとは、知らぬが仏、誠にもつて泰平なものだ。〔中略〕教科書成金と世にいふが、僕はこれはよほど深い罪業だと思つてゐる。露骨に言へば、外に碌な能もないくせに、教科書などで産をなす人間は、きつと罰が当つて三代目位くらゐには兎唇か低能が出るに決つてゐるとさへ信じてゐる。一体辞書や単行本といふものは、とにかく買はうと買うまいと、それは購買者の自由である。愚劣だと思へば買はなければいゝのだ。ところが教科書といふ奴は、みすみす愚書だとわかつてゐても買はなければならない。つまりそこに愚物愚教科書を濫造する余地が大いにあるのであり、またもつて僅か教科書成金を蛇蝎視する所以もあるのだ。⁽⁸²⁾

要するに、こうした描写を通じて中野が批判したのは、英語教師たちのみせる言行不一致の態度、すなわち彼らのような英語を媒介とした文化研究ではなく、むしろそれにより得られる副次的利益の獲得に向けて日々齷齪している彼らの欺瞞的な姿であつたのである。

さらに、こうした事実と連動させて中野が批判したのは、前出の②の問題であつた。ここで中野は、自らの主張する内容を裏づけるべく、つぎのような世代論的枠組みに基づく議論を展開する。すなわち、かつて明治初年期に英語を学んでいた者たちの世代、たとえば福沢諭吉や森有礼、内村鑑三らに代表される者たちの世代を歴史上における「初代」とし、一方で、彼らにつづいた当時の戦前昭和期にいたる者たちの世代を「二代目三代目」として一括するのである。そのうえで、彼は、両者における英語そのものへの「心理」を比較し

たうえて、その差異をつぎのように指摘する。すなわち、前者の「初代」のときには、その緊迫した時代情勢もあり、彼らの中には真剣な採長補短精神が存在しており、「その表面的な欧化主義、伝統破壊にもかゝらず、根本は常にかうした確乎たる国家的信念によつて貫かれてゐた」という。ところが、その後につづいた者たちの世代、すなわち中野を含む「二代目三代目」の「心理」が「いけなかつた」という⁽⁸³⁾。なぜなら、彼らが英語を学びはじめた時代には、すでに前述した緊迫感は消失し——むしろ時代は「英語謳歌の大勢」を享受していたとされる⁽⁸⁴⁾——、かわりに英語の成績の如何だけで生徒の人間の価値を測ることをも憚らない専門技術者⁽⁸⁵⁾、そして、自らを生んだ日本文化への劣等感から、英米の礼賛と崇拜に走ってしまう者たちが跋扈しはじめたからである。そのうえで、こうした者たちがみせる日々の姿を、中野はつぎのように描写する。

英米の制度風習を称揚して、自らのそれにケチをつけさへすればそれだけで知的優越が誇れるかの如く考えたり、自分たちの作つた軍艦が傷ついたニュースを得意さうに特ダネめかして放送して歩いたり、敵側の美点には恐ろしく敏感だが、同胞の赤忠には痴呆的に鈍感であつたり、勢ひの及ぶところはかつてあの一部青年たちをしてわが祖国ソヴィエトと叫ばしめたあの亡国者心理に到ることは必定である。⁽⁸⁶⁾

そして、このような態度をみせてきた者たちが、いざ戦争がはじまると、堂々と「外国文化の研究は日本文化の特色知悉を目的とする」などといったスローガン唱和をはじめたのである。これには中野も、「口に閑所がないとはよく言つたものだ」と閉口したように⁽⁸⁷⁾、当時の英語教師たちの行動は、まさに時流迎合と自己保存とを目論んだ欺瞞的行動として映ってしまうのであつた。

しかしながら、こうした一方で、中野は上述の欺瞞性が、戦時下におけるすべての英語教師たちに当てはまるわけではないことを承知していた。なぜなら、先述の世代論的枠組みに立つ彼からみれば、こうした事態は、前出の「二代目三代目」の者たちにかざられるからである。そして、今後の時代推移に伴う世代交代の可能性を考えると、彼が一転して、期待を寄せるようになる世代の者たちが存在していた。それは、ほかでもなく、これら「二代目三代目」の後につづこうとする当時の若手英語教師たちであつた。なぜなら、彼によると、こうした若者たちが生きている時代とは、「最初から荊の道」⁽⁸⁸⁾、すなわち英語はすでに敵

国語であり、したがってこれに従事しているというだけで、彼らは世間より様々な不利益を被る立場にあったからである。むろん、こうした逆境のもとで、自らの学問をつづけていくためには、それ相応の決意と理念が確立されていなければならない。そして、すでに第1章でも確認したように、こうした逆境に怯まない求道者的な生き方こそ、中野がかねてより共感していたものにほかならないのであった。すると、ここから彼にとり、戦時下に生きる若者たちの存在が、必然的にこの上なく頼もしいものとして映ってくるようになるわけである。

しかし、現実の英学界に再度目を移せば、そこには依然として、先述の不誠実な態度をみせる旧世代の者たちが君臨している。これに不満を持った中野はまず、「後には有能な青年教師が目白押しに並んである」との認識から、「教員室の火鉢を囲んで、Rip Van Winkle でないが、季節外れの愚にもつかぬ床屋政談より外に能のない不勉強な老人教師」たちに対し、「教育盛りの子供でもあればとにかく、でなければ早々に退陣してもらひたい」とした⁽⁸⁹⁾。さらに、彼は、今後の英語科時間数の削減により、必然的に生活苦に陥ることが予想される若者たちの立場から、かさねてつぎのような「お願ひ」をも述べている。

斯学の老大家諸氏に僕の全進退を賭けてお願ひがある。この動揺期に際し、漸く教育盛りの妻子をかゝへ、よし国家大使命の前とはいへ、明日の生活のための限りない不安に脅えなければならぬ若い英語教師たちに関しては、どうかこれらの人たちの身になつて苦しんでもらいたい。個人の生活、一家の安定からいへば誠にかくの如き悲痛な経験はないのである。かつて英語の順風満帆時代に諸氏がよく指導者として重きをなしたとすれば、今日この逆境悲運の時機に於てもまた進んで同行の後輩に苦しみを共にすべきが当然ではなからうか。旧態依然たる姑息的な思ひつきなどには僕等はほとんど何の興味も感じないのだ。⁽⁹⁰⁾

つまり、それまでの順境を謳歌してきた「老大家」たちは、いまこそ、不条理にも時代の逆境にあえいでいる若者たちの苦悩に思いを馳せ、それを自らの問題として誠実に引き受けるべきであるというのである。こうした言及の背後には、むろんこれとは相反する態度をみせる彼らへの反感、すなわち従来の学界に君臨してきた彼らが、その「指導」下にある後学の若者たちと誠実に一体化しようとはせず、むしろその苦境から目を背け、恬

然として傍観者の態度をとろうとする、すこぶる冷酷で無責任な態度への反感が存在していたといえる。このように、学界の全面的刷新に向けて動き出そうとする中野の「老人」たちへの態度には、一貫して厳しいものがあつた。

以上が、「直言する」において行われた人格批判の内容である。ここで、あらためてその要諦をまとめてみるとすれば、つぎようになる。すなわち、当時の英学界には、学問そのものに附随して、既存の老指導者たちをいただく強力な共同体主義が存在していたこと。したがって、そこに生きる者たちは、あらかじめ規定・公認された枠組みや立場に即した行動をとることを常態化させたため、自らの率直な信念を賭した、そして物事の本質や革新に迫る対話を堂々で行うことがなかつたこと。これを裏返していえば、彼らが平素よりみせていた言動とは、彼らの学問的な営為にかかわるそれをも含め、あくまでもその場を取り繕うための打算から生まれた建前にすぎず、決して彼らの真率なる本心や実態に根差したものではなかつたこと。したがって、いざ周囲の状況が変化し、それに同調することが自らを利すると判断すれば、その言動も容易に変化させるし、また、こうした無思想的で⁽⁹¹⁾、他律的な関係を内面化した者は、上述のごとく自らの確固たる信念に基づいた自覚的行動をとることはないため、本質的に無責任であり、さらにしばしば冷酷であつたこと。そして、こうした人間性こそ、長年学界に君臨してきた長老たちをはじめとする教師たちの日常行動の中に如実に反映されているということであつた。要するに、彼らがその本来の仕事であるはずの学問と誠実に向き合わないことと連動した、行動一般の欺瞞性、ならびに各人が本来的に持つはずの本心を粉飾し、圧殺することを是とする強力な共同体主義による相互間のコミュニケーション不全が問題化されていたといえる。

むろん、こうした一連の態度こそ、すでに第1章で確認したように、中野が人間として嫌悪するものであつたことはいうまでもない。そもそも中野は、自らの志す学問に誠心誠意没入しつつ、その過程で作られた理念でもって、自らを圍繞する環境の如何にかかわらず、力強く生きていくことを理想としていた。また、周囲の他者との間では、決して自らの本心を取り繕いつつ建前で接するのではなく、互いがつねに自己更新の可能性を踏まえつつ、本音で対話できる関係を生きることを望んでいた。そこには、個人を他律的に規定するような枠組みや立場といったものはなく、あくまでも——「文学の精神」を体現しようとする中野ら

しく——個々の人間の存在があるのみであった。しかし、現実の英語教師たちがみせる態度とは、こうした理想とはかけ離れたものであった。中野によれば、彼らは一人の人間として誠実に自己や他者、学問に向き合おうとすることはなかったのである。よって、当時の英語教師たちの欺瞞性やコミュニケーション不全が糾弾されたことは、中野がかねてより体現しようとしていた人間性からして至極当然であったといえる。

同時に、これらの欠陥が指摘された背景として、当時の彼が協力していた「国内思想戦」の影響も指摘できる。すでに前章においてみたように、中野は、当時の「大東亜共栄圏」の確立に向け、国民各人の思想生活を見直し、その清算に努める「国内思想戦」運動に邁進していた。また、本章冒頭でも論じたように、彼が「直言する」を公にするきっかけになったのも、同じ「国内思想戦」であった。さらに、こうした「思想戦」に臨む際の彼の考えが、つぎのようなものであったことも、前章で確認した通りである。すなわち、中野を含む国民各人は、その日常生活において、決して己の本心を取り繕うことなく、また他者の欺瞞を放置することもなく、かわりにそれらを誠実に直視して対話をかさねつつ、その克服に努めることで、国民総力の結集を図っていくというものであった。くわえて、こうした人間的触れ合い・溶け合いが要求される場においてこそ、文学者がその職能をもって積極的に貢献していくべきであるというのも彼の信条であった。こうした事実を踏まえると、中野が「直言する」において、結果的に、これらの原則とは相反する教師たちの行動を告発したということは、要するに、彼の考える「国内思想戦」を阻害する人格的要因を取り除こうとしたということにほかならず、これをいいかえれば、「直言する」とは、じつは「大東亜戦争」という「総力戦」の完遂に向けて学界を総動員することを目的とした、中野なりの文学者的使命感に基づく行動であったとも考えられるのである。さらに、ここから、中野の意図した目的が、決して英語教師たちへの人格攻撃そのものにはなかったことも同時に判明する。

これを裏づけるように、中野は当時の「国内思想戦」を明確に意識したと思われるつぎの言及を行いつつ、彼を含む今後の英語教師たちのあるべき姿について、再定義を行っている。

僕等が今こそアメリカ心、イギリス心を克服すべきであることに何人が異論があるであらうか。だがアメリカ心やイギリス心は、彼等に対する僕等の無知によつて克服しうるもの

と思つたら大間違ひだ。無知こそ最大の危険であるのだ。英語全廃や削減をもつて米英克服の道だなどと思ふのはとんでもない見当違ひである。同時に僕等は単なる必修制の改廃や時間の多寡だけで眼に角立てる時ではない。真に英米文化のあり方を知り、これを克服するの途を示すことが英語英文学に従ふものの道であらう。責は大きく、かつ重い。われら今こそ選ばれた少数者の自信をもつて、負荷に堪へなければならない。(92)

つまり、当時の時代要請である「アメリカ心、イギリス心」の「克服」のためには、決してそれらの研究そのものが否定されてはならないのであり、むしろ英語英文学者たちはこうした研究を、それを圍繞し保証する制度的枠組みの如何にかかわらず、誠実に実践していくべきであるというのである。したがって、それまでの実態とは乖離した欺瞞的言説を弄することで、「旧来の英語教育制度のために、徒らに軽蔑を買ふやうな命乞ひをすることはよさうではないか」とされるとともに⁽⁹³⁾、従来の彼らにおける英語屋的な精神や英米崇拜意識も、同様に否定されることになった。そして、かわりに今後の学界が体現すべき「日本人的主体意識」に基づく採長補短精神の真の回復に向けて、「今こそ再出発すべき時ではあるまいか。〔中略〕現に僕自身がいまだに三代目意識を完全に克服し得たとは誇り得ないのだ。僕も要するに同行者の一人なのだ。共に責め合ひ励まし合つて新しい黎明に進まうではないか」とされた⁽⁹⁴⁾。つまり、最終的には、中野を含む教師たちの連帯と融和が説かれていたわけである。

このように、中野による「直言する」とは、たしかに表面的にみれば、英学界関係者たちへの人格攻撃が大部分であり、その筆致も辛辣なものであったといえる。しかし、こうした態度は、中野自身が体現しようとしていた人間性、ならびに当時の「国内思想戦」の理念に生きようとする彼なりの文学者的使命感に基づく行動であったのであり、決して同学の教師たちの人格を攻撃し、それを貶めること自体が目的であったわけではなかった。むしろ、彼の抱いていた真の目的とは、その誠心に基づく現状批判を自ら実践することで、そうした行動を許さない学界の、閉塞的な精神風土の改革に向けた呼び水とするとともに、同学の教師たちにおける連帯と相互理解を促すことにあった。じじつ、彼はこの記事を通して、一貫して、自らをその批判対象の例外として位置づけることはなく、同学の他者を一方的に断罪しつづけることもなかった。

しかし、こうした中野の真意は、なかなか他の者たちには通じなかったというのが彼の主張である。彼自身、以前より、周囲から「袋叩きになることは千も覚悟の上」で学界批判を行ってきたにもかかわらず、予想した反応は「案外なく、「そのくせ蔭ではボソボソ言っている」のが聞こえてくるという⁽⁹⁵⁾。そして今回も、「直言する」の連載が進むにつれて、彼が「偶々触れた話題を、あれは誰だ、これは誰だ、と実に愚劣きはまる卑俗な詮議立てする徒輩」が出てくる始末であり、彼の意図を誠実に理解し、自らの問題として正面から引き受けようとする者は、ほとんど現れなかったという。こうした実情に直面した中野は、そのやりきれなさをつぎのように表明する。

僕の意図はそんな誰が言った、彼が言ったの個人的興味にあるのではないのだ。なんなら Flaubert の言ひ草ではないが、すべて僕自身だと思つて貰つてもよいのだ。僕の目的は、これらの問題をみんな自分自身の問題として肚の底から考へ直してもらひたかつたのである。第一今頃誰がモデルだなどとそんな呑気なことを考へてある時でもあるまい。かかる奥女中の興味こそ長く英語英文学界を毒して来たものに外ならないのだ。⁽⁹⁶⁾

このように、中野がこれまで詳細に論じてきた学界関係者たちの欠陥は、皮肉にも彼自身の言動に対する一連の反応によって実証されてしまっているというのが彼の主張であった。同時に、中野の目指す「国内思想戦」のありようも、当時における学界の精神風土には根づきにくいことも示唆された。かりにこうした中野の述べる一連の反応が事実であれば、これをみた彼の心中において、学界の主流をなす者たちや、指導者への不信感が増大し、以後、学界におけるアウトサイダーとして、そのありようを鋭く批判していく視座を一層強固なものとしていたことも推察される。

おわりに

本稿では、1942（昭和17）年10月から翌43（昭和18）年2月にかけて公刊された「直言する」に焦点を合わせ、そこで行われた人格攻撃の背後にあった要因について検討を行ってきた。その結果、中野の「直言する」とは、彼自身がかねてより体現しようとしていた人間性、ならびに当時の「国内思想戦」に邁進する彼の文学者的使命感に基づく行動であったことが明らかになった。中野が当時の英語教師たちの人格に焦点を合わせ、それを痛烈に批判した背景には、むしろ文学者・教養人

として人間そのもののありようや生き方に興味を寄せる彼の特徴もあったが、そこに折しも、同時期の特殊な時代状況がかさなったこと、すなわち「大東亜共栄圏」の確立に向けて国民の思想生活を見直す「国内思想戦」運動に対する中野の協力的態度もあった。ここから、彼の著した「直言する」とは、こうした「思想戦」に邁進する文学者としての立場から、学界を戦争に向けて総動員することを目的とした国策協力言説としても位置づけられることになる。

このように、学界全体のありようについて鋭い批判をくわえていた中野であったが、一方で、そのような行動をとっていた彼自身、戦争遂行主体である国家の政策を正面から批判するまでにはいたらず、むしろその枠組みを追認し、便乗していた。そして、その際には、自身の文学者としての学識と理念を賭すかたちで協力していたため、それだけ自身の行動への責任感を伴うことにもなった。その結果、敗戦を迎え、日本の悲惨な破滅を目にすることになった彼は、自らの戦時中の行動への責任を痛感することになり、これがその後の一連の自己慚愧や⁽⁹⁷⁾、民主・平和運動家としての彼の生き方として結実することは周知の通りである⁽⁹⁸⁾。

同時に、自身の出身母体である英学界についても、中野は、その戦争責任と加害者性を問うようになる。すでに紹介したように、戦前の英語教師たちは、長らく、自らが平素より行う外国語・外国文化研究を、（その実態はどうかであれ、少なくとも建前上は）日本国家・文明のさらなる向上発展を目的とした文化事業として位置づけ、その社会的意義を主張していた。換言すれば、彼らは、その学識でもって、日本文化や社会全体を指導できる立場に立つことを公共の場で要求していたわけである。しかし、こうした者たちが、いざ戦時期になり（あるいはそれにいたるまでの諸段階において）みせていた行動は、到底中野の心を満足させるものではなかった。なぜなら、彼の認識によれば、こうした「指導者」たちは、日本が悲惨な破滅に向かうまでの間、その学識を活かして行動することはなく、むしろその口を閉ざし、あるいは逃避しつつ、事態を傍観するのみにとどまったからである⁽⁹⁹⁾。

すでに前章において、中野が当時の「老大家」たちの無責任性を批判していたことからわかるように、彼が元来抱いていた「責任」に対する考え方とは、つぎのようなものであった。すなわち、ある個人や集団が、他者を指導する立場にあるかぎり、そこには相応の責任が生じてしかるべきで

あるというものである⁽¹⁰⁾。したがって、結果的に、日本が悲惨な破滅にいたるまでの期間、平素より社会における指導者を自認し公言してきた英語関係者たちが、そこにいたるまでの流れを押しとどめることに失敗した（あるいは、そのような流れに飲み込まれてしまう運命にあったにせよ、いかなるかたちや程度であれ、その学識を戦争抑止、あるいはその被害を最小限にとどめるための実際的な行動に結びつけることがなかった）のであれば、必然的に、彼らには相応の責任と加害者性が伴うことになる。なかでも、そうした無力な体制を作り出し、容認し、強化してきた（中野を含む）学界指導者たちの責任は、きわめて重大である。このような見地から、彼は戦後、（自らを含む）学界指導者たちによる徹底した自己慚愧と、その学内的立場からの退散を要求することになる。

こうした中野の思想と行動とを踏まえると、戦後間もなくして行われた同僚の市河三喜（1886～1970）との論争について、あらためて解釈し直してみる余地が生まれてくる。なぜなら、この論争で扱われたテーマには、学界の戦争責任にまつわる問題が含まれるからである。かねてより日本英学界における最高指導者の一人として君臨していた市河を相手に、その従来からの基本姿勢を厳しく批判した中野の動機と、そこで俎上に載せられた内容について、本稿は詳論する余裕を持たない。しかし、これについては、稿を改めたうえで、あらためて検討してみる価値がある問題である。

謝辞

本研究を行うにあたっては、中野好夫の薫陶を受けられた中村敬氏（成城大学名誉教授）より、多くの貴重なアドバイスと励ましの言葉をいただきました。この場を借りて、深謝申し上げます。

註

- (1) 中野好夫「直言する」(『英語青年』第88巻第2号, 1942年) 20頁。
- (2) 中野好夫「直言する(5)」(『英語青年』第88巻第6号, 1942年) 19頁。
- (3) 秋山安永「中野好夫について」(八幡大学社会文化研究所『紀要』第8号, 1981年)。
- (4) 佐藤林平「中野好夫の人物像(Ⅰ)」(慶應義塾大学日吉紀要『言語・文化・コミュニケーション』第18号, 1997年)。
- (5) 速川和男「行動する英語教師——中野好夫に学ぶ」(立正大学経済学会編『経済学季報』第48巻第3, 4号, 1999年)。
- (6) 中村敬『なぜ、「英語」が問題なのか?——英語の政治・社会論』(三元社, 2004年) 248~268頁。同・峯村勝・高柴浩『「英語教育神話」の解体: 今なぜこの教科書か』(三元社, 2014年) 6~7頁。
- (7) 中野利子『父 中野好夫のこと』(岩波書店, 1992年)。
- (8) 宮崎芳三『太平洋戦争と英文学者』(研究社, 1999年) 105頁。
- (9) 同上 105頁。
- (10) 同上 105頁。
- (11) 同上 106頁。ここで氏は、中野の心中において徐々に戦争への「迷い」が生まれ、その結果、同時期の時代状況については「とりあえず判断を中断」した可能性を指摘している。しかし、後述の通り、本稿はこれとは反対の結論を得ることになる。
- (12) 川澄哲夫編『資料日本英学史2 英語教育論争史』(大修館書店, 1978年) 509~775頁。
- (13) 前掲宮崎書 101頁。
- (14) 斎藤兆史『日本人と英語——もう一つの英語百年史』(研究社, 2007年) 152頁。なお、氏は「直言する」について、「英語・英文学界というコップの中の嵐を、ただ威勢のいい文体で論じただけの記事に過ぎ」ず(同上 154頁)、「何ら具体的提言をしているわけではない」(同上 151頁)との読後感を表明している。ここで、氏が期待している「具体的提言」とは、おそらくは、「英語」(語学)のプロが得意とするいわゆる「英語教育論」であることが推測されるが、かりにそうである場合、そのような認識上の枠組みでもっては、当該論説を正しく理解し評価することはできないといわざるを得ない。なぜなら、既述のごとく、そもそもこの「直言する」とは、こうした「教育論」とは別次元の問題を扱ったものであり、むしろ「教育」を行う者たちの背後にある人格的醜態に注目したものであったからである。つまり、「直言する」を理解するためには、その分析上の枠組みを「語学」専門家による「英語教育論」に限定することは得策でないのであり——これでは、中野の論説が単なる学界への「当たり散らし」を行った言説として素通りされてしまいかねない——、さらに後述するように、中野が英語そのものの習得や技術論に拘泥する人物ではなかったことも考えても、ぜひともその枠外から分析を進めていく必要がある。また、なぜ「直言する」が、氏のいう「英学界というコップの中の嵐」を専ら扱っていたのかという問題についても、本稿は仮説を提示する。
- (15) 中野好夫『風前雨後』(講談社, 1990年) 272頁。ここで中野の経歴を紹介するにあたっては、同書の「年譜」を参考にした(同上 338~344頁)。
- (16) 前掲中野利子書 50頁。
- (17) 「英語勉強法 中野好夫」(『時事英語研究』第1巻第3号, 1946年) 16頁。
- (18) 同上 16頁。
- (19) 『中野好夫集 第2巻』(筑摩書房, 1984年) 179~188頁。
- (20) 中野好夫「研究の問題と方法(8): 生への興味」(『英語青年』

- 第 86 卷第 8 号, 1942 年) 19 頁。
- (21) 中野好夫「夏日有感」(『英語研究』第 35 卷第 5 号, 1942 年) 44 頁。
- (22) 中野好夫「青年に与ふ」(『英語青年』第 85 卷第 2 号, 1941 年) 22 頁。
- (23) 中野好夫「読書くり言」(同『酸っぱい葡萄』みすず書房, 1979 年, 331~335 頁, 1939 年初出), 同「読書と教養」(『現代教養講座 第 1 巻』三笠書房, 1940 年), 同「若い女性の読書に就いて」(『婦人日本』5 月号, 1942 年), 同「二つの態度: 読書について」(『少女の友』第 35 卷第 12 号, 1942 年), 同「文学と生きること」(『少女の友』第 36 卷第 5 号, 1943 年)。
- (24) 前掲「読書くり言」332 頁
- (25) 中野好夫「教養主義批判」(『知性』第 3 卷第 5 号, 1940 年) 29~30 頁。
- (26) 前掲「読書と教養」187 頁。
- (27) 同上 190~191 頁。
- (28) 同上 192 頁。
- (29) 同上 191 頁。
- (30) 同上 194 頁。
- (31) 前掲「教養主義批判」30~31 頁。
- (32) 中野好夫「痴人妄想」(『語学教育』第 192 号, 1943 年) 19 頁。
- (33) 中野好夫「語学——如是我観」(『学生と語学』矢の倉書店, 1938 年) 9 頁。
- (34) 同上 40 頁。このように、語学的スキルそのものに関してはそれほどの価値を認めず、むしろそれを通して得られた知性や人間性に注目する中野の姿勢は、敗戦直後にいたるまで一貫して変わることがなかった。「語学が少しできると、なにかそれだけ他人より偉いと思うような錯覚がある。くだらない知的虚栄心である。実際は語学ができるほどだんだん馬鹿になる人間の方がむしろ多いくらいである。」「英語を話すのに上手なほどよい。書くのも上手なら上手ほどよい。読むのも確かなら確かなほどよい。だが、忘れてはならないのは、それらのもう一つ背後にあつて、そうした才能を生かす一つの精神だ。」(中野好夫「英語を学ぶ人々のために」*The Youth's Companion* 第 2 巻第 11 号, 1948 年, 2~3 頁)。
- (35) 中野好夫「文学らしい文学を」(『中野好夫集 第 1 巻』筑摩書房, 1984 年, 1940 年初出) 326 頁。
- (36) 同上 326 頁。なお、同様の言及は 1941 (昭和 16) 年にも行われているほか (中野好夫『文学試論集』中央公論社, 1943 年, 284~285 頁), 以下の引用からも明らかな通り、こうした文学そのものへの中野の態度は、敗戦直後にいたるまで一貫して変わることがなかった。「人間の個々の行為や出来事をいくら正確に写してみても、それだけで、直ちに文学が出来るわけではないのです。いささか単純ないい方知れぬが、少くとも文学を文学とさせるには、作りごとや嘘やキレイごとで装われた現実の背後に、なにかより真実なものを求めてやまないともいうような心がなければ、文学にならないと
- 思うのです。」(中野好夫『文学の常識』要書房, 1951 年, 42 頁)。
- (37) 中野好夫「K. H. に答へる」(『英語青年』第 88 卷第 1 号, 1942 年) 18 頁。
- (38) 前掲「青年に与ふ」22 頁。
- (39) 前掲「英語勉強法 中野好夫」16~17 頁。
- (40) 前掲「語学——如是我観」12 頁。なお、中野による「秀才」批判は、のちに分析する「直言する」においても行われている。彼によれば、このような者たちこそ、単に「教師の講義を後生大事に暗記し、ひたすら師の説に背かざらんことを念願とする点取虫にすぎない」というのである。そして、「英才はドンゾリ連の中にだつて、常習欠席者の中にだつて結構ある」ことを信じる中野は、将来教師になることを目指す教え子たちに対し、つぎのようなアドバイスを送っていたという。「優等生などは放つたらかしておいてよいから、劣等生、不良児の中にこそ案外大物が潜んでゐることを見逃すな」と (前掲「直言する (5)」19 頁)。
- (41) 青地晨「いちばん怖い人」(『中野好夫集 第 1 巻』月報, 筑摩書房, 1984 年) 2 頁。
- (42) ルーゼンドルフ著・伊藤智央訳『総力戦』(原書房, 2015 年) 51 頁。
- (43) 額綱厚『総力戦体制研究』(社会評論社, 2010 年) 47~49, 52~58 頁。
- (44) 同上 186 頁。
- (45) 同上 257 頁。
- (46) 栄沢幸二『「大東亜共栄圏」の思想』(講談社, 1995 年) 55~80 頁。
- (47) 奥村喜和男『尊王攘夷の血戦』(旺文社, 1943 年) 8 頁。
- (48) 同上 151 頁。
- (49) 同上 147~148 頁。
- (50) 同上 147 頁。
- (51) 同上 151~152 頁。
- (52) 同上 152~153 頁。
- (53) 赤澤史朗『近代日本の思想動員と宗教統制』(校倉書房, 1985 年) 301~302 頁。なお、一連の「思想戦」運動においては、政府当局のみならず、(これと利害を共有していた) 一般市民による活動も著しかった (バラク・クシュナー著・井形彬訳『思想戦: 大日本帝国のプロパガンダ』明石書店, 2016 年)。
- (54) 前掲『尊王攘夷の血戦』150 頁。そもそも、戦時期日本の「国体」ナショナリズムは、西欧文化への採長補短的態度を否定することはなかった。むしろそれを「徹見」「醇化」し、「聡明にして宏量なる新日本を建設すべき」とされていたことからわかるように、「西欧」という他者は、「国体」の補完的滋養分として機能することを期待されていた (文部省『国体の本義』1936 年, 6 頁)。
- (55) 若槻泰雄『日本の戦争責任 下』(原書房, 1995 年) 190 頁, 同『売業者たちの戦後責任』(原書房, 1997 年) 146~149 頁。これに関連して、中野の戦争協力と、『アラビアのロレ

- ンス』(1940年)との関係性への考察については、新川明「中野好夫と『アラビアのロレンス』——作品成立の背景をたどり戦時下の思想を読む——」を参照されたい(法政大学沖縄文化研究所編『沖縄文化研究』第12号、1986年、267~291頁)。
- (56) 前掲「語学——如是我観」22, 43頁。前掲中村書254頁。また、歴史的な存在としての「英学」精神の詳細については、小林敏宏「英学思想史への一視角：兵学と英米地域研究の弁証法的変容に関する考察」(拓殖大学人文科学研究所『人文・自然・人間科学研究』第26号、2011年)を参照のこと。この論文では、近代日本の「英学」精神に胚胎した「兵学」思想の影響が論じられている。
- (57) 中野好夫「アメリカ管見」(『知性』1月号、1942年)70頁。
- (58) 安倍能成『我が生ひ立ち』(岩波書店、1966年)583頁。なお、ここでの引用は、1943(昭和18)年当時、東条英機内閣の書記官長を務めていた星野直樹が安倍に放ったとされる言葉である。
- (59) 前掲『尊王攘夷の血戦』375~376頁。
- (60) 櫻本富雄『日本文学報国会——大東亜戦争下の文学者たち』(青木書店、1995年)80頁。
- (61) 中野好夫「日本文学報国会外国文学部会について」(『英語青年』第87巻第8号、1942年)20頁。
- (62) 前掲櫻本書109頁。
- (63) 同上113~114頁。
- (64) 同上111頁。
- (65) 同上144頁。本大会の詳細については、尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』(勁草書房、1971年)18~58頁を参照のこと。
- (66) 中野好夫「第一回大東亜文学者会議」(『教育』第10巻第12号、1942年)86頁。
- (67) 姜泰雄「思想戦と映画——劇映画『ハワイ・マレー沖海戦』をめぐって」(日本思想史・思想論研究会『思想史研究』第2号、2002年)163頁。
- (68) 「大日本言論報国会」の活動が、きわめて非合理的で狂信的であったことは、赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム』(日本経済評論社、1993年)159~205頁において詳述されている。
- (69) 中野好夫「思想戦と文学」(『知性』第5巻第12号、1942年)80頁。
- (70) 同上79頁。
- (71) 同上80頁。
- (72) 前掲「直言する」20頁。
- (73) 中野好夫「直言する(7)」(『英語青年』第88巻第8号、1943年)17頁。
- (74) 中野好夫「直言する(2)」(『英語青年』第88巻第3号、1942年)18頁。
- (75) 前掲「直言する」20頁。
- (76) 前掲「直言する(5)」19頁。
- (77) 前掲「直言する」20頁。前掲「直言する(2)」18頁。
- (78) 同上「直言する(2)」18頁。
- (79) 岡倉由三郎『英語教育の目的と価値』(研究社、1936年)。
- (80) 中野好夫「直言する(3)」(『英語青年』第88巻第4号、1942年)20頁。
- (81) 同上20頁。
- (82) 中野好夫「直言する(4)」(『英語青年』第88巻第5号、1942年)18頁。
- (83) 前掲「直言する(7)」17頁。
- (84) 中野好夫「直言する(6)」(『英語青年』第88巻第7号、1943年)17頁。
- (85) 前掲「直言する(5)」19頁。なお、ここで中野が披瀝する世代的な歴史認識は、小林敏宏氏ならびに音在謙介氏により先駆的に指摘された「英学」→「英語教授」・「英語教育」という時代区分論と概ね符合する(小林敏宏・音在謙介「英語教育史学」原論のすすめ：英語教育史研究の現状分析と今後の展開への提言」(拓殖大学人文科学研究所『人文・自然・人間科学研究』第17号、2007年)、同「英語教育」という思想：「英学」パラダイム転換期の国民的言語文化の形成」(拓殖大学人文科学研究所『人文・自然・人間科学研究』第21号、2009年)。
- (86) 前掲「直言する(7)」17頁。こうした言及からもわかる通り、中野が憂慮したのは、つぎのような特徴を持つ英語関係者たちの存在であった。すなわち、①「英語ができるかどうか」を人間評価の絶対的基準としてしまうほど、視野が狭隘化していること、つまり、彼にとっては「英語」しか見えておらず、こうした意味でそれに隷属していること、②英米の規範を無批判に内面化しつつ、それを体現することが彼らの処世上の利益と結びついていることである。こうした英語・英米崇拜主義的態度は、近代日本の英語受容史の変遷や——英語が対決すべき英米の文化研究に伴う術にとどまっていた時代から、やがてそのような対決心が後退し、英語そのものの存在が前景化していく時代への変化——、そもそも日本が英米を範として「近代化」を成し遂げようとした事実を想起すれば、ある意味、近代日本の宿命であったといえるし(佐伯啓思『日本の宿命』新潮社、2013年参照)、また英語関係者に潜在的についてまわる特徴(病理?)であったともいえる。
- (87) 前掲「直言する(3)」20頁。
- (88) 前掲「直言する」20頁。
- (89) 前掲「直言する(5)」19頁。
- (90) 前掲「直言する(6)」17~18頁。
- (91) ここで中野が指摘した英学界の無思想性は、同時期における彼らの行動を検証した宮崎芳三氏によっても、結論されている(前掲宮崎書120~121頁)。
- (92) 中野好夫「直言する(8)」(『英語青年』第88巻第9号、1943年)14頁。
- (93) 前掲「直言する(6)」17頁。
- (94) 前掲「直言する(7)」17頁。
- (95) 前掲「直言する(2)」18頁。
- (96) 前掲「直言する(8)」14頁。
- (97) 中野好夫『反省と出発』(中央文化社、1946年)。ここに集め

られた彼の戦争責任論の多くは、前掲『酸っぱい葡萄』、および『中野好夫集 第1巻』に再録されている。

- (98) 戦後、いわゆる「進歩的文化人」の一人として活躍することになる中野であったが、こうした一方で、昭和 20～30 年代にかけて盛んであった唯物史観的解釈に基づく太平洋戦争史観については、これを相対化することをいとわない姿勢をみせている（林房雄『大東亜戦争肯定論』2014年、中央公論

新社、235～236頁）。

- (99) 前掲「英語を学ぶ人々のために」、中野好夫「英語関係者に望む」（『英語青年』第92巻第1号、1946年）18頁。
 (100) 中野の「責任」観については、赤澤史朗氏も同様の指摘をしている（赤澤史朗「知識人の戦争責任論——大熊信行と中野好夫」歴史学研究会編『歴史学研究』8月号、1982年）。

中野好夫「直言する」（1942～43）について

齋藤 浩一

（東京海洋大学学術研究院海事システム工学部門）

要旨： 1942（昭和17）年10月から翌43（昭和18）年2月にかけて、中野好夫著「直言する」が『英語青年』誌において連載された。この全8回にわたる記事では、主として当時の英語教師や学者たちの人間性が焦点化され、その醜態が痛烈に暴露・批判されていた。本稿は、そもそも中野がなぜこのような行動をとったのかという問題意識のもと、同時期中野が示していた人生観や行動を分析する。そして最終的に、彼による「直言する」とは、当時の「大東亜共栄圏」の構築に伴う「思想戦」に対する、彼なりの文学者的使命感に基づく協力の一環であったことが明らかになった。つまり、この「直言する」とは、英学界を「大東亜戦争」の完遂に向けて総動員することを目的した国策協力言説であったといえる。

キーワード： 中野好夫、文学、思想戦